



輸血を受けた人からの献血禁止 ～狂牛病感染の危険性～

UKでは、狂牛病の騒ぎはひと段落した感があったが、2週間ほど前から再び脚光を浴びている。

去る3月16日、厚生省は、1980年1月1日以降に輸血を受けた人の献血を禁止すると発表した。直接のきっかけとなったのは、3か月前にヤコブ病(vCJD)で死亡した英国人男性が、輸血を通して感染した可能性があるとして指摘されたことである。その男性は、1997年に輸血を受け、その6年後にヤコブ病を発病し死亡に至ったわけであるが、その輸血に使われた血液は、後に脳に障害が現れヤコブ病(vCJD)と診断されることとなったドナーが、発病する随分前に献血したものだ。

いまだ、この男性の感染が輸血によるものだと100%断言できるわけではないが、これは、危険性を回避するためにとられた措置である。これは、ヤコブ病(vCJD)が輸血を通して感染する可能性を示唆する UK初の事例となった。

UKでは、9年前に最初の新変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)が確認されてから、139人の人がヤコブ病(vCJD)が原因で死亡している。他に7人の人がヤコブ病(vCJD)と診断され、現在も生存している。いまだ研究が続いているが、ヤコブ病(vCJD)の原因は、狂牛病(BSE)感染牛であるとの見方が濃厚で、人間感染型の狂牛病であると考えられている。今回の献血禁止が1980年以降と指定されたのは、1980年以前にはUKで狂牛病(BSE)が発見されていないからである。

UKでは、国立血液サービス(National Blood Service)が毎年、250万の献血を集めている。患者の十分な治療のためには、毎日、9000の献血が必要になるという。

通常、イギリスと北ウェールズでは、定期的に170万人の人が献血している。厚生省の予測では、今回の規制によって、5万人に影響が出ると見ている。スコットランド輸血サービス(Scottish Blood Transfusion Service)はまた、この規制で最大10%のドナーを失うことになるであろうと予測している。

そのため、厚生省は、NHS(National Health Service:国の無料の医療システム)の病院に対し、血液の節約をするよう命じた。また国立血液サービスは、献血することができる人に献血を呼びかけるための広告キャンペーンを実施することが検討している。

一方、政府は、社会の混乱を防ぐために、今回の措置は予防措置であり、実際に輸血を通して感染する可能性は非常に低いと強調する。これまで分かっている範囲では、ヤコブ病(vCJD)と後に診断された人から血液を受けた人が15人いるが、うち誰一人として発病が確認されていない。

政府にとってのもう一つの大きな問題は、NHSに1980年輸血を受けた人すべてをトラッキングする機能がないことである。そのため、人々の自己申告に頼るしかなく、措置が徹底できていないのが現状である。当面、混乱を防ぐための、相談窓口コールセンターが設けられた。

ちなみに、アメリカやフランスなど多くの国では、英国に居住した人からの献血を既に禁止している。